田中　応明

建築設計製図Ⅱ

第１課題
集合住宅

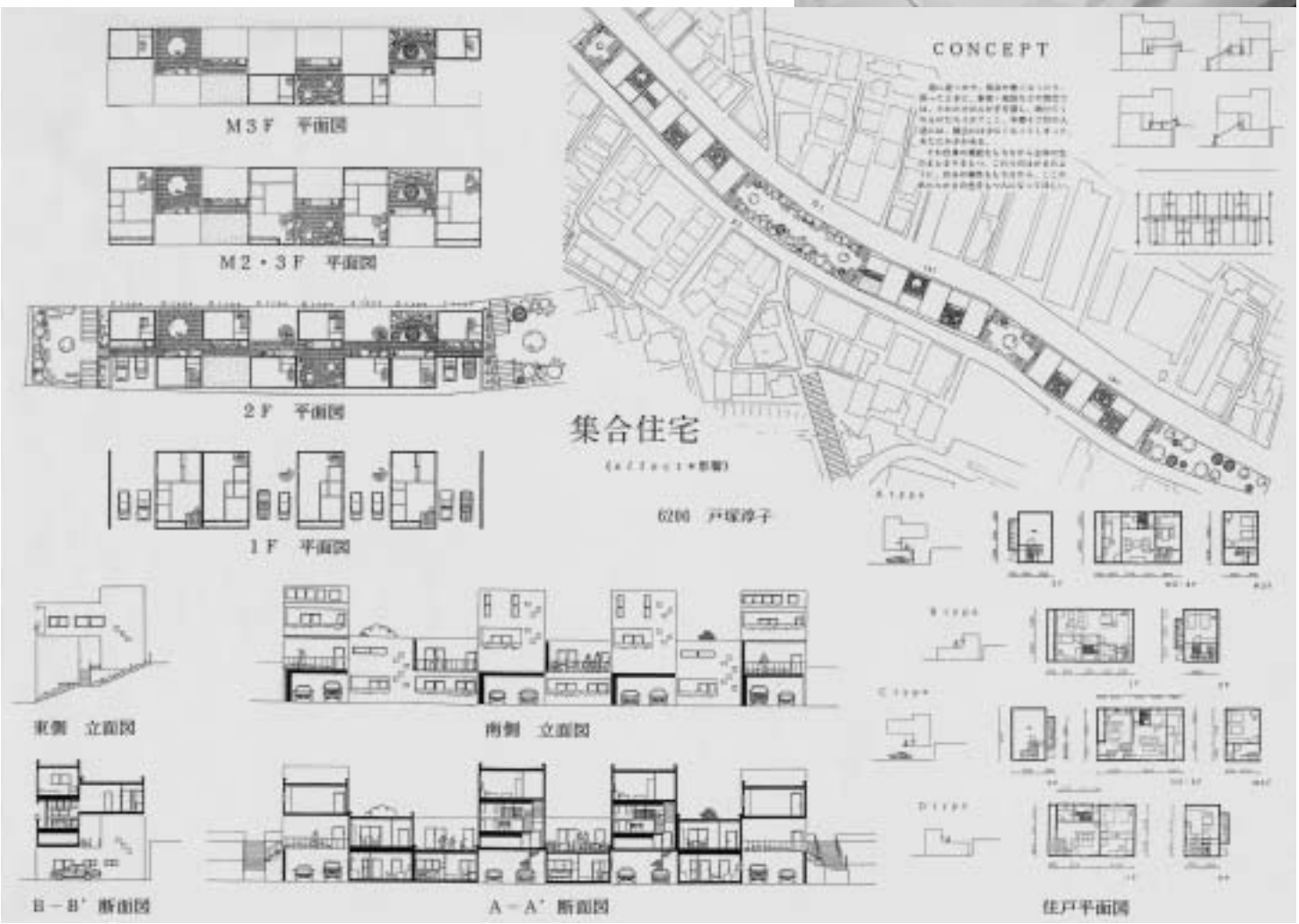
２年２組

担当＝
本杉　省三
宇杉　和夫
高宮　真介
飯塚　章
野沢　正光
橋本　功
吉井　信幸

田中　応明

近年、人口の増加に伴い数多くの集合住宅が建てられ、建設される土地はその時代のニーズに応え様々な風景を我々に与えてくれる。しかし、現在あまりにも早すぎる風景の作り替えは「その土地の本来の姿」というものを記憶として残すことを難

戸塚　淳子



しくしている。
今回の集合住宅の設計において私はこれらのことに着眼し、本来の姿を調べた結果、幻の水路を見つけ、「今昔再建」と題して再び水路を作り、それを軸に地域の縁というものを図った。

指導＝吉井　信幸
地域の固有性をめざして
設計をするに当たり、敷地を視るという行為はとても大切な事です。単に目で見るだけでなく、人や車の流れ、風の流れ、光、音、臭い等、五感で視るものの他、周辺の環境、地域の人々の心等、色々洞察する必要があります。この作者は、これらの他に、この地域の歴史に着目しました。色々な文献を調べるうち、昔この土地に川が流れていた事を知り、幻の水路を再現する事により、この地域の固有性を表現しようとしています。また、この細長い敷地を水路でつなぐ事により、１つの集落的まとまりを感じさせる事に役立たせています。さらに水路を堀のように使い、パブリックとプライベートをゾーニングし、パブリックには憩いの場や集いの場をうまく設けています。このように幻の水路創出に端を発し、ロマンを膨らませ、水路を色々な機能として利用している事は優れています。その他、祭なども含めた地域との関わり合い等にも配慮したブロックプランとなっているこ事も評価できます。
建物住居計画においては、住まい方を想定して数種類のユニットプランを考え、デザイン的にも細長い計画が単調にならないよう、分節に心掛けています。また、それだけでなく集住の価値も考慮した計画として説得力を持たしています。全体として、表現の独自性、密度、模型の精度も含めレベルの高い作品といえます。

戸塚　淳子
ここ、本郷４丁目には、あたたかさがあります。この集合住宅に住む人にも、この影響を受け、あたたかさを持ってほしいと考えました。
L型と逆のL型を組み合わせ、４パターンの家をつくることによって、中央に通路をもうけ、家を交互にずらすことによって、両側の道路にいる人と接触できるようにしました。また、家をずらして組み合わせることによってできた空間を、この集合住宅の住民の交流の場としました。

指導＝吉井　信幸
人と人との関わりを大切にしたい敷地とその周辺を調べてゆく中で、地域に住む人々の心の暖かさにふれ、これから創る集合住宅との関わりと、その集住体内でのコミュニティーを大切にしたいとの願いが、この計画の原点となっています。
４つのユニットプランの組合わせにより、路地空間を思わせる通路をうまく創出させた事はすばらしいアイディアです。
ある部分では住宅の庭先の通路を歩く人と生垣越しに会話する。ある場面では道路を行き交う人と挨拶ができる関係を生み出し、ある部分では南北に抜ける路地と交叉し新たな交流の場を創出しています。このように地域住民、棟内住民それぞれが色々なシーンでコミュニケーションが持てるようにしたいという気持ちを、形の違うプランの組合わせにより具現化させた計画は高く評価できます。